

目 次

I 研究報告

平成30年度校内授業研修について

ー「生徒の質問力向上」に向けた取り組みー（研修部 柴田 創一郎）・・・・・・・・・・2

II SSH報告

①異文化地域での探究活動（マレーシア）（東海林 拓郎）・・・・・・・・・・ 30

②タイ王国研修に参加して（伊藤 健吾）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

III 事業報告

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業

（英語科 山條 陽子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

平成30年度校内授業研修について

－「生徒の質問力向上」に向けた取組－

秋田北鷹高等学校研修部

1 本校が抱える課題について

本校は、2011年4月に4校を統合して開校し、今年度統合8年目を迎えた。普通科（4クラス）・生物資源科（1クラス）・緑地環境科（1クラス）の3学科を有し、今年度4月現在の生徒数は651人（男子291人・女子360人）である。普通科は、入学時に特別進学コース（1クラス）と探求コース（3クラス）に分かれ、2年次には探求コースがさらに文系コース・キャリアコース・スポーツコースに分かれる。普通科においても就職希望者の割合は高く、2017年度卒業生（226人）の進路状況は進学135人、就職90人、その他1人である。なお、本校は2013年度より文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（以下SSH）に指定され、最先端の科学研究分野で活躍できる人材の育成を図るとともに、地域産業を支え、地域を活性化する人材の育成をも目標としている。

本校生徒が抱える課題①②と、統合によって複数の学科・コースを抱え、多様な進路希望を有する生徒がいるが故に生じた課題③を次に挙げる。

課題①課題研究発表会における「質問する力」の不足

課題②生徒の学習意欲の低さ

課題③生徒の進路希望が多様であるため、授業改善の対象がしぼりにくく、授業改善が「組織」でなされず「個業」になりがち

2 課題解決に向けて

課題①②③の改善に向けて、「全教科共通の授業改善テーマ」を掲げて実践を行うことにより、授業改善に対する職員の協働意識を育み、生徒の成長・変容を得ることを目指した。

（1）授業改善テーマの設定と周知

今年度の全教科共通の授業改善テーマを「生徒の質問力向上」と定めた。テーマ設定の理由として、まず課題①「質問する力の不足」に対して、日常の授業実践で直接改善を図ることが挙げられる。例年12月に実施されるSSH生徒研究発表会を最終ゴールとし、生徒の質疑の能力向上を図ることが第一の設定理由である。次に、課題②「学習意欲の低さ」について、間接的に改善を図ることである。授業中、分からないことを放置せず、質問を促すことを一年間全教科で実施することによって、学びへの無気力を改善し、学習意欲を育むことができると考えた。さらに、「質問力」向上による副次的効果を二つ挙げる。一つは、他者から必要な助言を引き出す力、会話を広げ深める力、他者への思いやりの心を育むことで、生徒のコミュニケーション能力を向上させ得ることである。二つ目は、授業中に因果関係を考えたり、比較したりする機会を増やすことにより、生徒の考える力（論理的思考力）を向上させ得ることである。最後に、教職員の課題③に対して、「質問力向上」という全教科で取組可能な共通の授業改善テーマを設定することで、教科を超えて、組織的な授業改善の取組が可能となる。

(2) 目指す姿と今年度の重点課題

「生徒の質問力向上」をテーマとした授業改善を行うことによって目指す生徒の姿は、「生徒が『質問力』の習得と活用を通して、課題研究等の探究活動に自ら主体的に取り組み、深い学びに至る姿」とした。課題研究における課題発見能力、テーマ設定能力は、その研究の成否を決める重要な力である。日常の授業において、気付く力や疑問を持つ姿勢を全教科で意識的に育むことで、目指す生徒の姿の実現を図った。

1年目の今年度は「質問力の習得」に向けて、「テーマの普及・浸透」を図ることを重点課題とした。具体的には次の3点を重点的に取り組んだ。

- ①全校（全教科＋全校生徒）で取り組むこと
- ②効果的な授業方法やアイデアを共有・蓄積すること
- ③取組を外部（特に、同地区の中学校）に発信すること

(3) 提案授業と協議会の実施

テーマの普及・浸透のため、一学期と二学期に提案授業週間を設け、各教科の代表が「生徒の質問を生かした授業」をテーマに提案授業を行った。全職員を3つのグループに分け、グループごとに提案授業を参観し、授業後に協議会を開催して成果と課題を話し合った。協議会後の職員アンケートでは「他教科の授業を参観し、他教科の教員と授業について協議する機会は滅多にないため、新鮮だった」という声や「生徒の質問の生かし方に関して良いヒントが得られた」等の肯定的な評価が多数を占めた。

（※提案授業及び協議会の概要についてはP 6－P 19 参照）

(4) 検証方法

検証にあたり、全校生徒を対象に、4月（年度当初）と7月（一学期末）と12月（二学期末）の3度アンケート調査を実施し、授業の姿勢と質問の姿勢についてそれぞれ自己評価をさせた。また、7月と12月には、授業中の質問を意識することによって学習意欲・コミュニケーション力・考える力が向上したか否かについて、「向上した～向上していない」の4件法で自己評価させた。さらに、教員が「生徒の質問を生かした授業」を実施していたか否かについて、「実施していた～実施していない」の4件法で評価させた。アンケート調査の実施は、クラス担任が各クラスで一斉に行った。

教員を対象に、7月と12月に2度アンケート調査を実施した。授業を担当する学科・コースについて、授業の姿勢と質問の姿勢を評価させた。また、「生徒の質問を生かした授業」を実施したか否かについて、「実施した～実施していない」の4件法で自己評価させた。

（※アンケート結果についてはP 20－29 参照）

3 生徒・職員アンケート結果の傾向について

生徒アンケートの「授業の姿勢」に関して、四つの選択肢の中で最も肯定的な回答である「授業内容に対して、常に、疑問点を発見しようと心がけている」と回答した生徒の割合は、全校では大きな向上が得られなかった。しかし、3年生は学年全体及び全クラスで顕著に向上した。肯定的な回答の割合や、その向上の程度が、学年間・クラス間で大きく

差が出た結果となった。この傾向は「質問の姿勢」に関しても同様であった。

職員アンケートの「担当クラスの質問の姿勢」の評価において、三つの選択肢の中で最も肯定的な回答である「授業中、自ら積極的に質問する生徒が多いクラスである」と回答した割合は、全学年にわたって向上している中でも、特に 3 年生に対する評価が顕著に向上しており、先に示した生徒アンケート結果と同様の傾向が見られた。

生徒アンケートにおいて、教員が「生徒の質問を生かした授業」を実施していたか否かについて、「実施していた～実施していない」の 4 件法で評価させたところ、肯定的回答の割合が 8 割近くに上ったことから、各クラスにおいて「生徒の質問を生かした授業」が実施され、職員間に「質問力向上」というテーマが一定程度普及・浸透していたことがうかがえる。職員アンケートにおいても「生徒の質問を生かした授業」を「実施した・どちらかと言えば実施した」と回答した教員が 7 月・12 月ともに 6 割近くに上った。自由記述に記された授業アイディアは 7 月 18 件、12 月 19 件、延べ 37 件に上った。教科別では、農業科職員の肯定的回答の割合が、7 月と比べて 12 月調査時には顕著に向上した。農業科職員の自由記述欄に、授業時の実習記録において生徒の質問を生かした取組をしたり、現場見学の振り返りの際に生徒の質問を生かしたり、工夫された取組事例が複数挙げられた。農業科各クラスの生徒アンケート結果において、肯定的回答の割合が同学年の普通科クラスよりも高い傾向が見られた。

4 成果

一部の学年・クラスに限定されるものの、「質問力向上」というテーマは一定程度職員・生徒に浸透し、それに伴い「質問の姿勢」等の意識と行動の変容を確認することができたことが最大の成果である。特に、二度にわたって実施した提案授業週間において、他教科の授業を参観し、他教科の教員と授業について協議する場を設けたことに対する肯定的な声が多数あった。

5 課題（次年度に向けて）

職員アンケートにおいて、7 月・12 月ともに約 4 割の教員が「生徒の質問を生かした授業」を「実施していない・どちらかと言えば実施していない」と回答している。この教員間の意識や取組の差が、生徒アンケートにおける学年やクラス間の差の一因と考えられる。

教員間の意識や取組の差を解消するため、次年度以降取り組むべき具体的方策の一つが合科授業の推進である。本校では、数年前から博士号をもつ教員（生物）が、農業科・地歴公民科・英語科等と「コラボ授業」と称した合科授業を単発的に実施してきた。一例を挙げると、生物の分野の知識を元にした環境問題を学習するにあたり、住民投票という意思決定の要素（公民科）を交えた授業が実施されている。次年度、提案授業を行うにあたり、教科を超えた形で実施することが、本校の教員に新たな刺激・活力を与えることにつながると期待される。

平成30年度校内授業研修 年間計画

研修部

1 研究主題 質問力向上

2 主題設定の理由

①授業中、生徒の質問を促し、生徒の質問を生かす授業展開にすることで、**生徒の学ぶ意欲**を引き出し、本校生徒に不足する「学びに向かう力」(※)を高める。※平成30年1月職員アンケート結果より。

②日常の授業から、質疑を授業に取り入れることで、**課題研究発表会での質疑応答のスキルの土台**を養う。

※『SSH研究開発実施報告書第4年次』より

③授業中の質疑を通して他人との**コミュニケーション能力**を養い、**論理的思考力**を高める。

④どの教科でも取組可能な主題を設定することで、**教科を超えた職員の協働性**を育む。

3 実施内容

① 案授業週間 各教科の代表が研究主題に即した提案授業を実施、教科を超えて参観、協議会を実施する。

・第1回 5月22日(火)～30日(水)(別紙要項参照)

・第2回 10月9日(火)～17日(水)

②授業公開 第2回提案授業週間中(10月中旬)に開催し、提案授業も公開する。

③体験入学 8月1日(水) 中学3年生を対象とした体験授業の共通テーマとする。(※教務部との調整)

④評価方法 生徒アンケート(別紙参照) 4月・7月・12月(年3回実施)

職員アンケート(別紙参照) 7月・12月(年2回実施)

4 普及・浸透の手立て

- ・「質問の型リスト」クリアファイルの活用(作成はSSH推進部)
- ・「授業公開シート」の活用(別紙参照)
- ・「質問の質」を評価するルーブリックの試作・提案(別紙参照)
- ・通信の発行による情報の共有(月2回発行。授業内容の紹介、アンケート結果の公開等)
- ・研究主題を横断幕にして生徒昇降口と職員室内に掲示(4月)
- ・「質問力川柳コンクール」の実施(1月)

平成30年度第1回校内授業研修 実施要項

研修部

S S H推進部

1 目的 主題に即した提案授業を、教科を超えて参観・協議することで、授業力向上を図る。

2 主題 質問力向上

3 主題設定の理由

- ① 授業中、生徒の質問を促し、生徒の質問を生かす授業展開にすることで、生徒の学ぶ意欲を引き出し、本校生徒に不足する「学びに向かう力」(※)を高める。※平成30年1月職員アンケート結果より。
- ② 日常の授業から、質疑を授業に取り入れることで、課題研究発表会での質疑応答のスキルの土台を養う。
- ③ 授業中の質疑を通して他人とのコミュニケーション能力を養い、論理的思考力を高める。
- ④ どの教科でも取組可能な主題を設定することで、教科を超えた職員の協働性を育む。

4 期間 平成30年5月22日(火)～30日(水)

5 内容 教職員を3グループに分け、それぞれのグループで提案授業及び参観、協議会を実施する。

- | | | | | | |
|-------|----------|----------|-----|-----------|-----------|
| Aグループ | 5月22日(火) | 7校時(1N) | 授業者 | 柴田(国語) | 同日放課後に協議会 |
| Bグループ | 5月30日(水) | 1校時(2A理) | 授業者 | 東海林(理科) | 同日放課後に協議会 |
| Cグループ | 5月22日(火) | 4校時(1R) | 授業者 | 松井(地歴公民科) | 同日放課後に協議会 |

※グループ分け(別紙参照)

6 備考

- 1) 授業者は授業公開シート(別紙様式)に提案授業のねらい等を記載し、全職員の机上に配付する。
- 2) 各グループの授業内容・協議内容は、後日研修部通信(仮称)において紹介し、全職員で共有する。
- 3) 協議会の進行・記録等は、研修部員が中心に担当する。
(協議会は付箋紙を用いたワークショップ型で実施する。)
- 4) 第1回の成果と課題を踏まえ、第2回(10月上旬)を同じ主題で実施する。

7 担当 柴田創一郎

北鷹研修部通信 第2号（職員用）

平成30年5月25日（金）

秋田北鷹高等学校研修部

★提案授業レポート（Aグループ）

5月22日（火）1年N組 国語総合（授業者 柴田先生）

「話す・聞く」の領域。代表生徒（2名）のスピーチに対して、クラス全員が質問。その後、発表者が「一番良いと思った質問」を1つ選び、クラス全体で「その質問の良さは何か？」を考察しました。

代表者の三浦笑茉さんは、原稿に目を落とすことなく、聞き手を見てスピーチを実施しました。質問役の生徒達は、体を向けて集中して聞いています。

「全員が必ず質問する」という前提だと、よく話を聞こうとします。質問の場を設けることで、話を聞く態度・姿勢は格段に上がると感じました。



「良い質問の条件」を話し合う生徒達。難易度が高い課題で悪戦苦闘しました。協議会において、秋田大学大学院阿部昇先生（写真左）から「質問の『質』を評価するのはかなり高度なこと。評価の観点を示すなど、授業者はもっと必要な助言を与えるべきであった」という指導・助言をいただきました。

★生徒のまとめ（「良い質問」とはどんな質問か？）

- ・良い質問とは具体的にもっと詳しく聞き出せる質問や、比較したり表現したりする質問。
- ・相手が考えやすいものや答えやすい質問がいいのではないと思った。
- ・具体性があり、発表者の思いを、正確に、詳しく引き出す質問。

★協議会レポート（Aグループ）

5月22日（火） 16:05 – 16:50 会議室（後）

★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）



★成果（○）と課題（▲）

「視点1」について

- スピード感のある進行で、生徒の集中力を途切れさせることがなく、意欲を持続させた。
- ペアで質問させることにより、1人では話せない生徒でも前向きに取り組むことができた
- ▲グループ協議の際、発言力のある子の意見で決まると、残りの生徒は意欲的に話しているようには見えなかった。

「視点2」について

- ペア・4人グループにすることで、確実に交流は生まれた。
- ▲グループ協議の際に、発言力のある子の意見で決まると、グループ内のコミュニケーションは低調に。
- ▲各グループの発表は、すべて授業者のフィルターを通してクラスに伝達されていた。グループとグループ、生徒と生徒の間でのコミュニケーションは不足していた。

「視点3」について

- 考えやすい状況を授業者が意図的に作り出していたため、生徒はよく考えることができていた。
（時間制限・明確な指示・ブレインストーミング的な手段 等）
- ▲思考力が向上したか、発揮されていたかの評価はそもそも難しい。
- ▲Bグループ2, 3, 4班のまとめは、明らかに「本時の目標」から逸脱していた。
（主旨から外れた発言をどう処理するのか？）

★アンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・スピード感や授業の仕方、板書の見やすさ 等
- ・教師が細やかに気配りをしており、流れに乗り遅れる生徒がいなかった。
- ・立つ、向く、置く（鉛筆）。行動にメリハリがあり、集中力を持続しやすい（一人・グループ・ペア）
- ・質問するためのリストは、なかなか質問を出せない生徒にとってヒントになる。他の科目でも活用できるのではないかな。

北鷹研修部通信 第3号（職員用）

平成30年5月31日（木）

秋田北鷹高等学校研修部

★提案授業レポート（Cグループ）

5月22日（火）1年R組 現代社会（授業者 松井先生）

「各国の政治制度」の単元。サミット記念写真の立ち位置のルールから、全員が質問を考え、黒板に書くことでビジュアル化。クラスメイトの質問の中から良いと思ったものを選ぶ（友達いいね）等、工夫が凝らされていました。



「疑問を持つことから政治制度について理解する」というねらいのもと、生徒全員が黒板に疑問点を書きました。質問の答えから、制度の理由や制度の長短所を理解していました。

授業後の協議会で、武藤教頭先生から、「生徒の考えている顔、相談している顔が見られて、頭を働かせている」「生徒の話聞く姿勢が良く、参加意識の高い授業であった」という講評がありました。

自ら質問したことで、その後の授業への意欲が上がったと思われます。



【授業後のアンケート】

Q 自分で質問や疑問を挙げると、そうではない授業と比べて、何が違いますか？

- A 授業での自分の目標や課題が見つかって、授業にも集中して取りくむことができる。
- A 疑問がないと分かってないのに分かったような感じになり、内容を詳しく知ることができない。
- A 自分がした質問とともに授業の内容を記憶することができるので、思い出しやすい。
- A 考える量が違う。通常の授業より考えなければいけない。

★協議会レポート（Cグループ）

5月22日（火） 16:05 – 16:50 会議室（前）

★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）

★成果（○）と課題（▲）

- プリントが工夫されていた。（G7の並んだ写真から議院内閣制や大統領制に話をつなげる）
- 全員が黒板に疑問点を書くことができたことから生徒を上手にしていると感じた。
- 最後に取り組ませた「日本には議院内閣制と大統領制のどちらがいいか」という30字の作文に全員取り組んでいたことから、生徒は最後まで意欲的であったと感じた。
- 友達の疑問の中からいいと思ったものを選ぶ「友達いいね」はいいと思った。
- 生徒が書き終わるまで待つということがよかった。
- ▲疑問（質問）を板書させて生徒同士の質問のやりとりなどをさせるとよかった。
- ▲議院内閣制と大統領制のどちらがいいか、小グループで討議させてはどうか
- ▲議員内閣制と大統領制についていい点と悪い点を調べさせて発表させてはどうか。

★アンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・生徒に疑問を持たせる方法が思いつかなかったが、一つの方法を知ることができた。もっと知りたい。
- ・黒板に各自の質問を書かせたところが参考になりました。私の授業でも身近なものから授業の本題に結びつける工夫をしたいと思います。
- ・授業の流れが参考になった（資料を与えて、考えさせて（質問を考えさせて）、待つ（なかなか待てない…））
- ・生徒の授業態度が落ち着いていて、日頃からの松井先生の指導の積み重ねの成果を感じました。
- ・友達いいね文（お互いの意見を知る）。様々な授業のしかけがあった。
- ・生徒が自ら取り組まざるをえないような環境作り。

★成果と課題を共有しましょう！

お気づきだと思いますが、Cグループの協議会で使用した模造紙2枚を印刷室に掲示中です。印刷室にした理由は「先生方が、職員室内で足を止めるところ」です。同じ理由で、お茶・コーヒークーナー横にも1枚掲示しています。授業のプリントの印刷中、お茶で一服中、今回の提案授業の成果と課題をご覧ください！



北鷹研修部通信 第4号（職員用）

平成30年6月4日（月）

秋田北鷹高等学校研修部

★提案授業レポート（Bグループ）

5月30日（水）2年A組（理）生物基礎（授業者 東海林先生）

単元名「遺伝情報の発現」。ジグソー法を用い、生徒が「自分が持っている情報を必ずグループに伝えなければならない状況」を作り出しました。グループごとに「仮説を立て、それを質問の形で表現すること」という課題に取り組みました。パワーポイントやipad等も効果的に使用され、非常に提案性の高い、チャレンジングな授業でした。



グループのメンバーが、教室の四方に掲示された情報を確認する様子。この断片的な情報を理解し、自分のグループに伝達・活用しないと、この日の課題が解けない仕掛けになっています。授業後の協議会でも「ジグソー法がしっかり機能していた」という評価の声があがりました。

難易度の高い課題に悪戦苦闘する生徒たち。約20分という長い協議時間ながら、授業者にヒントをもらいつつ、集中力を途切れさせることなく頭をフル回転させていました。自グループ内だけでなく、隣のグループとも意見を交わす姿が印象的でした。



授業後の協議会において、今後の課題の一つとして挙げられたのが「発表スキル」でした。声の大きさ・説明の仕方等、改善の余地が指摘されました。生徒の「発表スキル」の改善にあたり、各教科で授業中に生徒に「発表の機会」を与え、継続的に指導していくことが必要だと感じました。



※「生徒の発表」について、「こういう指導が効果的」という実践例がありましたら、研修部（柴田）までお寄せください。

★協議会レポート（Bグループ）

5月30日（水） 15：45－16：30 会議室（後）

★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）



★成果（○）と課題（▲）

- 生徒は非常に意欲的にがんばっていた。「グループで考える」ということができていた。
- 役割分担が明確、自グループだけでなく、他グループとも交流している姿が印象的。
- ジグソー法が機能していた。
- ▲発表の仕方（声量、説明の仕方、スクリーン上の文字が小さく不鮮明 等）
- ▲グループリーダー不在の班は、協議も上手く進まない。出席番号順の座席にこだわることなく、グループ構成も意図的に行うべき。「コアになる生徒」を育成して。
- ▲「ヒント」が「ほぼ答え」に。「察しにくさ」もあり、「ヒント」なのに「つまづきの原因」になったようにも感じた。
- ▲「振り返り」の時間を1、2分作るためにも、授業冒頭がカギ。「しつけ」もしっかり。

★アンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・グループワーク、ジグソー法、プロジェクター使用
- ・言語活動を取り入れ、発表する場を設けることで、他人の発表を聞いて自分が発表したり、思考したりする視点の引き出しを増やすことにつながると感じた。
- ・すべて参考になりました。今日の東海林先生の授業は今後取り入れてみたいと強く感じました。
- ・疑問（謎）として提示して、しっかり個人で考え、グループでまとめていて、生徒にとっては非常に達成感のある授業でした。

この授業で使用された**プロジェクター・スクリーン・ipad・ポインター等、すべて学校の備品**(SSH)で、**どなたでも使用可能**です。興味のある方は東海林先生まで！！

平成30年度第2回校内授業研修及び秋季授業公開 実施要項

研修部

- 1 目的 ・主題に即した提案授業を実施し、教科を超えて参観・協議することで、授業力向上を図る。
・外部に公開することで、客観的な評価・助言等を受け、授業力の向上を図る。

2 主題 生徒の質問力向上

3 主題設定の理由

- ① 授業中、生徒の質問を促し、生徒の質問を生かす授業展開にすることで、生徒の学ぶ意欲を引き出し、本校生徒に不足する「学びに向かう力」(※)を高める。※平成30年1月職員アンケート結果より。
- ② 日常の授業から、質疑を授業に取り入れることで、課題研究発表会での質疑応答のスキルの土台を養う。
- ③ 授業中の質疑を通して他人とのコミュニケーション能力を養い、論理的思考力を高める。
- ④ どの教科でも取組可能な主題を設定することで、教科を超えた職員の協働性を育む。

4 内容 教職員を3グループに分け、それぞれのグループで提案授業及び参観、協議会を実施する。

Aグループ	10月 9日(火) 7校時(2A文)	授業者 柴田(国語)	同日放課後に協議会
Bグループ	10月15日(月) 7校時(3B)	授業者 菅原(英語)	同日放課後に協議会
Cグループ	10月17日(水) 6校時(1A)	授業者 成田(数学)	同日放課後に協議会

※グループ分け(後日)

5 備考

- 1) 授業者は授業公開シート(別紙様式)に提案授業のねらい等を記載し、全職員の机上に配付する。
(本時案・教材等は教室入口に置いて可)
- 2) 各グループの授業内容・協議内容は、後日研修部通信において紹介し、全職員で共有する。
- 3) 協議会の進行・記録等は、研修部員が担当する。(協議会は付箋紙を用いたワークショップ型で実施する。)
- 4) 上記の授業及び協議会は「秋季授業公開」の対象授業とし、地域の教育委員会・中学校に公開する。

6 担当 柴田創一郎

北鷹研修部通信 第9号（職員用）

平成30年10月12日（金）

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート（Aグループ）

10月9日（火）2年A組（文）国語演習（授業者 柴田先生）

「再生可能エネルギー普及のために何が必要か」というテーマで600字の意見文を作成、この時間は生徒間（3人1組）で互いの意見文に対する質疑応答を行った後、自身の意見文の100字要約を作成する、という授業。単に質問を出し合うだけではなく、「互いの意見を明確化・具体化するための質問」とはどういうものか、生徒に「目的を持った質問」を意識させる授業でした。



他の生徒の意見文に対する質問を考える様子。事前に「どこを、どう質問すれば、その人の意見は明確・具体的になるか考えて」という指示がありました。

生徒たちは悪戦苦闘しながらも、具体例を求めたり、根拠の真偽を問う質問を作成していました。

3人1組での質疑応答の様子。グループ編成は、生徒の学力や、意見文の内容によって授業者が意図的に編成しました。

授業後の協議会で「3人目の生徒への指導が必要。共感とか補足とか」「3人目の生徒に質問の善し悪しを評価させては」という意見が出ました。



【生徒の授業の振り返り】

- ・質疑をして自分の意見を具体的にすることで百字要約での主張が書きやすかった。
- ・「賦課金」の詳しい説明を求められ、相手に説明するうちに自分自身の理解も深まった。
- ・「コストを安くするには？」という質問で、具体例を考え、自分の意見が具体的になった。
- ・鋭いところまで聞いてくれたので、自分としてもよかった。

★協議会レポート（Aグループ）

10月9日（火） 16:05 – 16:55 会議室（後）



★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）

★成果（○）と課題（▲）

- 一方的ではなく、双方向のコミュニケーション（質疑）がなされていた。
- 他人の文章を読み、質問を考える中で、頭は十分使われていたと感じる。
- 「100字要約」の型が示されており、生徒は取り組みやすそうであった。
- 難解なテーマ（再生可能エネルギーの普及）に対して、生徒はよく頑張っていた。
- ▲授業のゴールは「100字要約」なのか「質問力向上」なのか、曖昧だった。
※この時間は「質問力向上」に重きを置き、要約ではなく600字のリライト（書き直し）の構想を練らせるだけで良かった。（指導助言者より）
- ▲「活動しているイコール意欲的」ではない。本当に意欲的かどうか、見極めは必要。
- ▲効果的な質問だけでなく、自分のダメな質問を振り返る場も必要。
- ▲生徒の知識不足が目立つ場面、文章の「あら探し」になってしまう場面もあった。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・授業展開のスムーズさ（タイマーの使用）
- ・エネルギー問題の課題文（地歴公民に使える）
- ・対立する考え、意見、知識が思考を深めるきっかけになる気がした。
- ・「対先生」の質問ではなく、生徒がまとめた文章に対する質問は考えやすく、しやすいと感じた。

【研修の在り方に対して】

- ・秋田大学の先生のような、外部からの感想・意見は必要だと思った（予算を捻出できないか??）
- ・グループの協議時間が短すぎました、深まりません。が、助言者のご意見で少しスッキリしました。等

北鷹研修部通信 第10号（職員用）

平成30年10月17日（水）

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート（Bグループ英語）

10月15日（月）3年B組コミュニケーション英語Ⅲ（授業者 菅原先生）

休み時間から授業への切り替えのため、「本時の歌」からスタートした授業。ペアワーク中心の活動的な展開でした。授業の最後もペアで「インタビューシート」を用いてQ & Aを行うことで、本文の内容確認や内容に対する意見を考える時間を確保していました。



単語帳を用いて発声確認と意味確認を行う生徒。授業後の協議会でも「単語の反復の徹底は丁寧であり、知識定着に生かしたい」「人間（教員）の声だと生徒も好き嫌いがあるだろうが、CDを使用するとそれもない」と評価する声があがりました。

「インタビューシート」を用いて、ペアで3題のQ & Aを行う生徒たち。「3題」とは、①本文内容を問う質問 ②本文内容への考えを求める質問 ③本文内容への疑問点を求める質問の3種類。これらのQ & Aを通して、理解力や好奇心の向上を狙っています。



【参観者の声】北教育事務所 滝沢剛指導主事

- 生徒の授業に臨む姿勢が素晴らしかった。全員が前向き。一生懸命に取り組んでいました。
- ペア主体の活動で、生徒同士の学び合いを大切にしている点がよかったです。
- ▲「質問」はやはり、自分の聞きたいことを聞くことが大切だと思います。

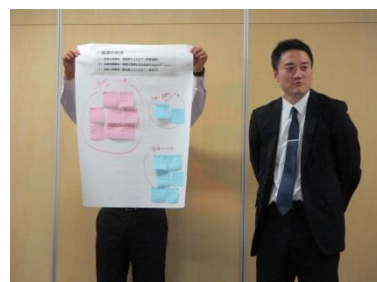
※コメント全文は、研修部（公開）→H30→中学校への授業公開→10月

★協議会レポート（Bグループ）

10月15日（月）16：05－16：55 会議室（後）

★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）



★成果（○）と課題（▲）

- 生徒が授業の流れに慣れており（ルーティン化）、スムーズだった。
- 生徒が常に活動しており、学習意欲やコミュニケーションの力の向上に結びついていた。
- 生徒の「参加感」がある授業であった。
- ▲生徒がどんな疑問を持っていたのか、聞きたかった。共有する必要はないのか？
- ▲ねらいや目標に対する評価は？ インタビューがメインなら、それを評価する必要あり。
- ▲果たして本当に「意欲的」だったと言えるのか？ 本時のねらい（自分の意見を相手に伝える）に対する意欲はあったのか？ 伝えることはできていたのか否か？

★指導・助言（武藤教頭より）

- ・今後の教師の役割はファシリテーター。生徒が参加しやすい場を作り、力を引き出す。
- ・大切なのは、生徒の思考がアクティブであること。生徒の思考を誘発し、思考を展開させる問を投げかけ、生徒から答えを引き出す。
- ・指導案の改善必要。単元構成や生徒の既習事項を入れる等、「北鷹様式」確立を。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・授業のパターンが決まっていることで、スムーズに安定した授業になると思った。
- ・「コミュニケーション能力を高める」とはどういうことなのか、自分の答えを導きたい。
- ・「活動イコール意欲的」なのか。これが今後の授業の中で大切になってくると感じた。
- ・「生徒をアクティブにさせる」とはどういうことなのか、考える機会になった。
- ・インタビューの3種類の質問は社会科にも生かせると思いました。

北鷹研修部通信 第11号（職員用）

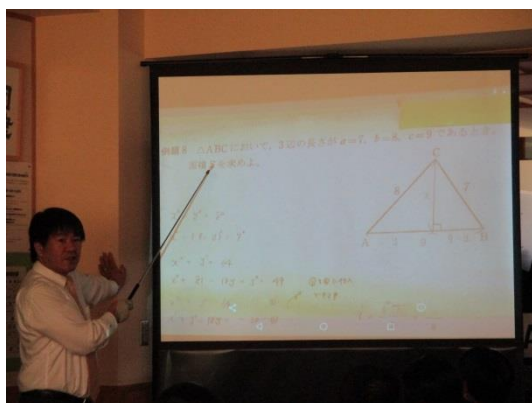
平成30年10月22日（月）

秋田北鷹高等学校研修部

★第2回提案授業レポート（Cグループ^o数学）

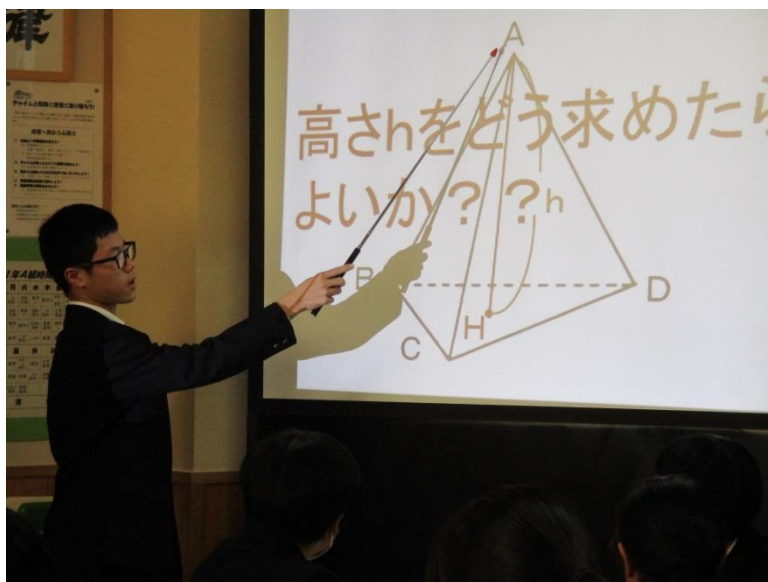
10月17日（水）1年A組 数学I （授業者 成田基倫先生）

「図形と計量」の単元。「正四面体の高さをどう求めるか」という課題に対して、生徒はグループで話し合い、ヒントをもらいながら頭をフルに使い続けました。授業中、スクリーンに図形を映し、それを動かすことで、視覚的に非常にとらえやすく、視聴覚機材の効果的な活用事例として評価する声が多く挙がりました。



既習事項の確認をする成田先生。スクリーンには「2週間前の学習プリント（生徒の記述あり）」の画像が映し出されています。協議会後のアンケートでも「タブレットはそういう風に使うんだな、と参考になった」等のコメントが多く寄せられました。

グループで検討した考え方を発表する生徒。協議会でも「前に出て発表・説明する生徒が慣れている」と評価する声がありました。また、「数学は『自分の考えを伝えること』に主眼を置いたグループ協議が効果的」という意見も出され、グループ活動の目的やテーマを明確にすること等の意見交換も活発に行われていました。



【参観者の声】森吉中校長 柴田保先生

○生徒が真面目に取り組んでいる。4人グループでよく話し合える学級にしている。

▲キーワード「必要性」 生徒は体積を求める必要性や、展開図を書く必要性を感じているのか？

※コメント全文は、研修部（公開）→H30→中学校への授業公開→10月

★協議会レポート（Cグループ）

10月17日（水） 15：40－16：30 会議室（後）



★協議の視点

- 1 生徒は授業中、意欲的だったか？（学習意欲）
- 2 生徒は授業中、相互に交流していたか？（コミュニケーション力）
- 3 生徒は授業中、頭を使っていたか？（思考力）

★成果（○）と課題（▲）

- 成田先生の指示が明確。グループ学習の雰囲気もよかった。
- プロジェクター等の使用。動画を用いて図形を回転させる等、視覚に訴えることで分かりやすい。図形が苦手な生徒でも取り組みやすい。
- ▲グループ活動の目的・テーマをしぼることが、本校の生徒には特に必要。
- ▲「本時の目標」が、作業内容になってしまっていないか。

★指導・助言（成田教頭より）

- ・生徒に難易度の高い課題に取り組ませ、授業者にとっても大きなチャレンジだった。
- ・「できないことをできるように」「解けなかったことが解けるように」、この実現のためには、我々が「指導の引き出し」を多く持つ必要がある。
- ・（動画の使用、グループ学習等）「生徒が授業に参加しやすい環境づくり」が大切。

★協議会後のアンケートから（参考になった点・ご自身の授業に生かせそうな点）

- ・生徒の進み具合を確認しながら、笑顔で対応している点。
- ・プロジェクターを使用して授業を構成したい。
- ・プロジェクターの利用が有効な場面を再確認できました。
- ・「生徒にとっては難しいだろう」と、つい教師が説明してしまう問題も、生徒にキチンと考えさせていた。
- ・「わからないこと」を、いかにわかるように導くか。
- ・グループ活動の生かし方は課題も見えてきました。

生徒アンケート推移①（４月→７月→１２月）

		授業の姿勢							
区分	実施月	授業内容に対して、常に、疑問点を発見しようと心がけている。		授業内容に対して、どちらかと言えば、疑問点を発見しようと心がけている。		授業内容に対して、どちらかと言えば、疑問を感じることなく受け入れている。		授業内容に対して、全く疑問を感じることなく受け入れている。	
全校	４月	65	10.0%	347	53.5%	217	33.4%	19	2.9%
	７月	65	10.3%	379	60.0%	171	27.1%	14	2.2%
	１２月	69	11.1%	356	57.1%	174	27.9%	20	3.2%
３年生	４月	12	5.3%	112	49.6%	89	39.4%	13	5.8%
	７月	24	11.0%	112	51.1%	70	32.0%	11	5.0%
	１２月	31	14.3%	119	54.8%	56	25.8%	8	3.7%
２年生	４月	21	9.7%	107	49.3%	82	37.8%	6	2.8%
	７月	18	8.5%	131	61.5%	61	28.6%	3	1.4%
	１２月	12	5.7%	118	56.5%	70	33.5%	7	3.3%
１年生	４月	32	15.5%	128	62.1%	46	22.3%	0	0.0%
	７月	23	11.5%	136	68.0%	40	20.0%	0	0.0%
	１２月	26	13.1%	119	60.1%	48	24.2%	5	2.5%

生徒アンケート推移②（４月→７月→１２月）

		質問の姿勢							
区分	実施月	授業中、疑問を感じたら、自ら積極的に質問する。		授業中、質問を感じても、自ら質問することはないが、指名されたら質問する。		授業中、疑問を感じなくても、指名されたら何とか質問しようとする。		授業中、疑問を感じることもなく、指名されても質問しようしない。	
全校	４月	73	11.2%	329	50.7%	219	33.7%	28	4.3%
	７月	80	12.7%	357	56.5%	179	28.3%	15	2.4%
	１２月	76	12.2%	346	55.4%	176	28.2%	24	3.8%
３年生	４月	22	9.7%	105	46.5%	86	38.1%	13	5.8%
	７月	39	17.8%	110	50.2%	62	28.3%	8	3.7%
	１２月	35	16.1%	113	52.1%	59	27.2%	9	4.1%
２年生	４月	20	9.2%	101	46.5%	86	39.6%	10	4.6%
	７月	24	11.3%	115	54.0%	67	31.5%	6	2.8%
	１２月	20	9.6%	99	47.4%	77	36.8%	12	5.7%
１年生	４月	31	15.0%	123	59.7%	47	22.8%	5	2.4%
	７月	17	8.5%	132	66.0%	50	25.0%	1	0.5%
	１２月	21	10.6%	134	67.7%	40	20.2%	3	1.5%

生徒アンケート推移③（7月→12月）

		Q.先生方は「生徒の質問を生かした授業」を実施していましたか？							
区分	実施月	実施していた。		どちらかと言えば、実施していた。		どちらかと言えば、実施していなかった。		実施していなかった。	
全校	4月								
	7月	193	30.5%	327	51.7%	83	13.1%	28	4.4%
	12月	117	18.8%	381	61.1%	102	16.3%	24	3.8%
3年生	4月								
	7月	39	17.8%	118	53.9%	41	18.7%	21	9.6%
	12月	33	15.2%	130	59.9%	38	17.5%	16	7.4%
2年生	4月								
	7月	54	25.4%	124	58.2%	31	14.6%	4	1.9%
	12月	22	10.5%	134	64.1%	45	21.5%	8	3.8%
1年生	4月								
	7月	100	50.0%	85	42.5%	11	5.5%	3	1.5%
	12月	62	31.3%	117	59.1%	19	9.6%	0	0.0%

生徒アンケート推移④（7月→12月）

		Q.「授業中の質問」を心がけることで、 <u>学習意欲</u> は向上しましたか？							
区分	実施月	向上した。		どちらかと言えば、向上した。		どちらかと言えば、向上していない。		向上していない。	
全校	4月								
	7月	82	13.0%	328	51.9%	177	28.0%	43	6.8%
	12月	77	12.3%	300	48.1%	188	30.1%	59	9.5%
3年生	4月								
	7月	26	11.9%	84	38.4%	81	37.0%	28	12.8%
	12月	28	12.9%	102	47.0%	56	25.8%	31	14.3%
2年生	4月								
	7月	19	8.9%	123	57.7%	58	27.2%	12	5.6%
	12月	14	6.7%	97	46.4%	80	38.3%	18	8.6%
1年生	4月								
	7月	37	18.5%	121	60.5%	38	19.0%	3	1.5%
	12月	35	17.7%	101	51.0%	52	26.3%	10	5.1%

生徒アンケート推移⑤（7月→12月）

Q.「授業中の質問」を心がけることで、 <u>コミュニケーションの力</u> は向上しましたか？									
区分	実施月	向上した。		どちらかと言えば、向上した。		どちらかと言えば、向上していない。		向上していない。	
全校	4月								
	7月	87	13.8%	295	46.7%	159	25.2%	46	7.3%
	12月	74	11.9%	281	45.0%	184	29.5%	57	9.1%
3年生	4月								
	7月	23	10.5%	86	39.3%	67	30.6%	20	9.1%
	12月	32	14.7%	84	38.7%	59	27.2%	23	10.6%
2年生	4月								
	7月	22	10.3%	111	52.1%	50	23.5%	21	9.9%
	12月	16	7.7%	96	45.9%	69	33.0%	26	12.4%
1年生	4月								
	7月	42	21.0%	98	49.0%	42	21.0%	5	2.5%
	12月	26	13.1%	101	51.0%	56	28.3%	8	4.0%

生徒アンケート推移⑥（7月→12月）

		Q.「授業中の質問」を心がけることで、 <u>考える力</u> は向上しましたか？							
区分	実施月	向上した。		どちらかと言えば、向上した。		どちらかと言えば、向上していない。		向上していない。	
全校	4月								
	7月	96	15.2%	325	51.4%	138	21.8%	26	4.1%
	12月	86	13.8%	335	53.7%	139	22.3%	35	5.6%
3年生	4月								
	7月	27	12.3%	104	47.5%	51	23.3%	14	6.4%
	12月	33	15.2%	102	47.0%	42	19.4%	21	9.7%
2年生	4月								
	7月	23	10.8%	114	53.5%	58	27.2%	9	4.2%
	12月	17	8.1%	118	56.5%	62	29.7%	10	4.8%
1年生	4月								
	7月	46	23.0%	107	53.5%	29	14.5%	3	1.5%
	12月	36	18.2%	115	58.1%	35	17.7%	4	2.0%

職員アンケート推移①（7月→12月）

質問 1 「生徒の質問を生かした授業」を実施しましたか？											
実施月	選択肢		ア 実施した。		イ どちらかと言えば実施した。		ウ どちらかと言えば実施しなかった。		エ 実施しなかった。		無回答
7月	総数	35	7	20.0%	13	37.1%	15	42.9%	0	0.0%	0
12月		43	8	18.6%	17	39.5%	15	34.9%	2	4.7%	1
7月	国語	3	1	33.3%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0
12月		4	2	50.0%	1	25.0%	1	25.0%	0	0.0%	0
7月	地歴公民	4	1	25.0%	1	25.0%	2	50.0%	0	0.0%	0
12月		3	1	33.3%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0
7月	数学	4	0	0.0%	0	0.0%	4	100.0%	0	0.0%	0
12月		4	0	0.0%	1	25.0%	2	50.0%	1	25.0%	0
7月	理科	5	2	40.0%	2	40.0%	1	20.0%	0	0.0%	0
12月		3	1	33.3%	1	33.3%	1	33.3%	0	0.0%	0

職員アンケート推移①（7月→12月）

質問 1 「生徒の質問を生かした授業」を実施しましたか？

実施月	選択肢		ア 実施した。		イ どちらかと言えば実施した。		ウ どちらかと言えば実施しなかった。		エ 実施しなかった。		無回答
7月	保健体育	2	1	50.0%	1	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
12月		4	2	50.0%	1	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	1
7月	英語	4	1	25.0%	1	25.0%	2	50.0%	0	0.0%	0
12月		4	2	50.0%	1	25.0%	1	25.0%	0	0.0%	0
7月	商業	1	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
12月		2	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	0	0.0%	0
7月	家庭										
12月		1	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	0
7月	農業	7	0	0.0%	4	57.1%	3	42.9%	0	0.0%	0
12月		9	0	0.0%	7	77.8%	2	22.2%	0	0.0%	0
7月	無回答	5	0	0.0%	2	40.0%	3	60.0%	0	0.0%	0
12月		9	0	0.0%	2	22.2%	6	66.7%	1	11.1%	0

職員アンケート推移②（7月→12月）

質問2 「授業に臨む姿勢」の評価											
実施月	授業の姿勢		評価者数	授業内容に対して、常に、疑問点を発見しようと心がける生徒が多いクラスである。		授業内容に対して、どちらかと言えば、疑問点を発見しようと心がける生徒が多いクラスである。		授業内容に対して、どちらかと言えば、疑問を感じることなく受け入れる生徒が多いクラスである。		授業内容に対して、全く疑問を感じることなく受け入れる生徒が多いクラスである。	
	学年	区分									
7月	全評価合計		87	4	4.6%	36	41.4%	37	42.5%	10	11.5%
12月			101	8	7.9%	40	39.6%	44	43.6%	9	8.9%
7月	3年生		26	0	0.0%	11	42.3%	12	46.2%	3	11.5%
12月			29	2	6.9%	11	37.9%	12	41.4%	4	13.8%
7月	2年生		37	2	5.4%	13	35.1%	16	43.2%	6	16.2%
12月			44	4	9.1%	16	36.4%	20	45.5%	4	9.1%
7月	1年生		24	2	8.3%	12	50.0%	9	37.5%	1	4.2%
12月			28	2	7.1%	13	46.4%	12	42.9%	1	3.6%

職員アンケート推移③（7月→12月）

質問3 「質問の姿勢」の評価

	質問の姿勢		評価者数	授業中、自ら積極的に質問する生徒が多いクラスである。		授業中、自ら質問する生徒は少ないが、指名されたら質問する生徒が多いクラスである。		授業中、自ら質問する生徒は少なく、指名されても質問しようとしていない生徒が多いクラスである。	
	学年	区分							
7月	全評価合計		75	10	13.3%	46	61.3%	19	25.3%
12月			89	19	21.3%	55	61.8%	15	16.9%
7月	3年生		25	3	12.0%	15	60.0%	7	28.0%
12月			27	9	33.3%	12	44.4%	6	22.2%
7月	2年生		29	4	13.8%	15	51.7%	10	34.5%
12月			32	5	15.6%	21	65.6%	6	18.8%
7月	1年生		21	3	14.3%	16	76.2%	2	9.5%
12月			30	5	16.7%	22	73.3%	3	10.0%

SSH 海外研修「異文化地域での研究活動（マレーシア）」

科学部：東海林 拓郎

一般社団法人 あきた地球環境会議の事業の一環として、科学部 ESD 班が取り組んでいる環境教育プログラムの検証をマレーシアの生徒などを対象に行った。

目的

訪問先であるマレーシア サバ州が抱える環境・衛生課題の視察、世界有数の生物多様性ホットスポットであるキナバル山麓の自然観察などを通じて、語学力の向上、多文化共生への理解力の向上、アイデンティティの形成等を促すことを目的とした

実施概要

日 時：平成 30 年 7 月 18 日（水）～7 月 26 日（木）（18 日・26 日は移動日）

場 所：マレーシア サバ州 コタキナバル市

参加者：科学部 ESD 班を含む 4 名

日 程：主だったものを以下に示す。

月日	実施内容
7/19（木）	コタキナバル市到着
7/20（金）	SK Inanam Laut にてプログラム実施
7/21（土）	民族・文化・宗教・環境に関わる視察や体験など
7/22（日）	
7/23（月）	気候変動に関わるセミナー参加 環境行政職員を対象にプログラム実施
7/24（火）	Peatswap Field Centre にて原生林と油やしプランテーションの境界線など視察
	SMK Beaufort にてプログラム実施
7/25（水）	SMK Sanzac にてプログラム実施
	SMK Putatan にてプログラム実施

滞在期間中、5 つの学校と 1 つの社会人向けセミナーで環境教育プログラムを実施した。対象者は 200 名を超える大掛かりなものであり、現地教育機関との調整を行ってくれたあきた地球環境会議には感謝したい。

成果

生徒の感想に注目すると、ごみの最終処分場では、自分より幼い子が働いている姿等を目の当たりにし、改めて「日本人で良かった」という感覚をもった生徒がいたり（国際性

の育成に貢献できた)、図鑑でしか見たことのない植物やスーパー等で希少な果実とされているものが炉端に生えている様子などから、生物基礎で学習する「バイオーム」の違いを感じた生徒もいたりした。また、3年生の生徒は、本研修の経験をもとに国立大学のAO入試に合格するなど、進路実現にも良い影響をもたらす研修となった。

いくらSSH校に指定されているとはいえ、今回のような研修は外部との連携なくして実現はしなかった。探求型の教育活動が求められる中、教員に至るまで、教員になってからのキャリアは様々と思うが、まずは個々人が持っているネットワークを活用した教育活動が有効であると思われる。このような外部連携が増えていくことを望みたい。



英語科：伊藤健吾



平成31年1月7日（月）～12日（土）タイ王国での海外研修を行った。本校から4名（モグラ班）、秋田中央高校から4名、横手高校から4名の参加者であった。本校から選抜された4名は決して学力が高いとは言えず、英語でのプレゼンなど到底無理に思えた。正直なところ、この研修に選ばれた際には、英語でのプレゼンは私が殆どを作らなければならないだろうと覚悟していた。しかしこの4名の生徒たちは、海外研修を励みに積極的に英語プレゼンの準備をし、必要であればALTに質問したりと意欲的に

学習に取り組む姿勢が見られた。SSH、並びに本研修が生徒に大きな影響を与えたと実感した。

タイではバンコク・クリスチャン・カレッジ（BCC）、ワタナ・ウィッタヤ・アカデミー、ワチュラウッド王立学校を訪問し、それぞれの学校の校風を感じたことも、生徒のみならず引率教員にとっても大きな刺激となった。BCCはハイテクを駆使し、グローバルな競争に勝ち抜こうとする意欲を感じ、女子校であるワタナ・ウィッタヤでは女子教育から社会を変えようとする姿勢、ワチュラウッドではタイの伝統を大切にしながら世界で活躍する人材育成を目指す姿勢が見て取れた。全体的にゆったりとした雰囲気の中で、生徒たちの自ら学ぶ姿勢が際立っていた。なお、バンコクの学生の英語力は目をみはるもので、英語プレゼンは原稿を見ずに流ちょうに行い、質疑応答も柔軟にこなしており、「学び」が「人生の質」に直結すると実感している様を目の当たりにした。

日程の合間をみて、バンコク市街を散歩したり、多くの王宮や寺院を見学する中で、地域格差や国民の貧富の差を目にすることが多かった。ホテルは非常に快適で、食事をしたレストランも最上級であったが、すぐそばには今にも崩れそうな住宅で暮らす人々を見て、発展途上国の課題を実感した。



※夜のバンコクの町並み



※トムヤムクンを一緒に



※タイ語で名前を書きました

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・情報や考えなどを伝えることが苦手な生徒が多い→英語科として学年ごとに段階的な取組をする
- ・自己表現(話すこと・書くこと)における正確性に課題がある→ALTと協力し、生徒のスピーキングやライティングに適切なフィードバックをする

具体の取組の内容

①校内の英語科共通の取組

1年生→「自分の意見を英語で述べるができる」

2年生→「相手の意見に対して質問をする」

3年生→「相手の質問に対して反駁する」

※教科書本文の内容理解に留まることなく、personalizationを重視する。

②公開授業の実施

目的①ディベートの要素を取り入れた言語活動による授業改善

②CAN-DOリスト形式の学習到達目標の活用と評価の工夫

③生徒の英語による言語活動時間の増加

第1回 7月17日 参加者12名

第2回 11月16日 参加者13名



<第2回公開授業の様子>

成果①

【定量的評価】

調査対象: 2年A組

(公開授業実施クラス)

Q1: ディベートは、英語力向上に役立っていると思いますか。

「はい」、どちらかと言えば「はい」→92%

Q2: Q1で「はい」「どちらかと言えばはい」と答えた人は、具体的にどう役立っていると思いますか。(1つ選択)

ア 英語学習に対する意欲向上 17%

イ 「話すこと」への抵抗感軽減 29%

ウ 即興的な自己表現 46%

エ その他 8%

成果②

【定性的評価】

①言語活動の高度化に向けた具体的な取組や授業改善が促進

・昨年度までと比較し、科会を開く回数が増加し、科内での情報交換の場が増えた

②パフォーマンス評価の継続的な実施等、学習評価方法の工夫・改善

・第2回公開授業協議会でパフォーマンスの評価方法として、タブレットの活用例を挙げ、指導助言の教授から評価された

今後の課題・方向性

①自己表現における正確性

・即興的に自己表現できるようになったと感じる生徒もいる一方、ディベートをする上で不足していると感じるもののトップは「語彙力」であった
・ALTと協力し、生徒のライティングに適切なフィードバックをする

②内容を深めるための背景知識量の増加

・インプット活動を工夫する
・トピックによって他教科と連携する

③英語科教員同士の指導や評価の共通理解

・学年ごとに段階的な指導を継続する
・CAN-DOリストの活用に向けて見直しをする

英語科「コミュニケーション英語Ⅱ」学習指導案

実施日時	平成30年7月17日（火）3校時
場 所	2年A組教室
対 象	2年A組
授 業 者	伊藤健吾
教 科 書	Big Dipper English Communication II

- 1 単元名 Lesson1 “Washoku around the World”
海外で様々なアレンジされた和食や、外国由来の食べ物をアレンジした日本の食文化について考える。
- 2 単元の目標 (1) 本文を読んだ後に、ペアワーク・グループワークを通じて自分の意見を言ったり、相手の発表をしっかりと聞こうとしたりする。(関心・意欲・態度)
(2) 本文中の表現を他の表現で言い換えたり、紙面中の写真・イラスト等を英語で説明したりすることができる。(表現の能力)
(3) 「和食」が海外でどのようにアレンジされているか、また日本人がどのように海外の料理をアレンジし日本の食文化の中に取り入れてきたか理解できる。(理解の能力)
(4) 国、地域、文化圏の違いにより、食文化も大きく異なっていることもあるという事実を理解している。(言語や文化についての知識・理解)
- 3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連
- 4 単元と生徒 41名（男子20名、女子21名）が在籍する普通科特別進学クラス。教科書の各 Lesson、各 part 毎に keywords を用いた retelling や、personalization を用い身近な話題について言語活動を行っている。英語でのやりとりに対しての抵抗感は少なくなってきたと実感している。
まだまだ語彙力が不足しており、加えて自分が言おうとする内容を表す単語がスムーズに思いつかない場面での柔軟さに欠ける。コミュニケーションに対する意欲を、語彙や文法を地道に学ぶ姿勢へと結びつけたい。

5 単元計画と評価規準（総時間 7 時間）

	学習活動	A コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
第1時	語句や表現を学び、part1を理解する。	日本と海外の食文化について、知っていること、思っていることを発言しようとする。		現在完了の用法を理解している。	
第2時	part1 の内容を、keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part1 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。		
第3時	語句や表現を学び、part2を理解する。			受動態の用法を理解している。	「和食」が海外の食文化の中でどのようにアレンジされているか理解できる。
第4時	part2 の内容を、keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part2 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。		
第5時	語句や表現を学び、part3を理解する。			SVC（補語が現在分詞／過去分詞）の用法を理解している。	日本人がどのように海外の料理をアレンジし日本の食文化に取り入れてきたか理解する。
第6時	part3 の内容を、keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part3 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。		
第7時 （本時）	海外でアレンジされた日本食は、"false" Japanese cuisine と呼ぶべきか、"globalized" Japanese cuisine と呼ぶべきか、それぞれの立場で debate を行う。				

6 本時の学習

- (1) 目標 海外でアレンジされた日本食は”False” Japanese cuisine と呼ぶべきか、”Globalized” Japanese cuisine と呼ぶべきか、それぞれの立場で英語の debate をやり遂げることができる。

(2) 指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5分	Q&A を行い、Lesson 全体の Review を行う。	・発言する生徒の数を最大限にするため、ペアワークで行う。	A
展開 40分	1) ディベートのテーマを聞き、本時の活動を確認する。 2分 2) 各チームでブレイン・ストーミングを行い、スピーチの準備をする 15分 3) Leader of Proposition (肯定1人目) 3分 4) Leader of Opposition (否定1人目) 3分 5) Member of Proposition (肯定2人目) 3分 6) Member of Opposition (否定2人目) 3分 7) Opposition Summary (否定3人目) 3分 8) Proposition Summary (肯定3人目) 3分 9) Judgment (ジャッジ) 3分	・テーマを理解し、それぞれのチームの立場を確実に理解しているか確認する。 ・それぞれのスピーチで用いる表現は、お互いが理解できるよう簡単なものにするよう促す。 ・必要であれば、質問を受け付ける。	A B
まとめ 5分	1) ALTによる講評を聞く。 2) CAN-DOリストを用いて自己評価を行う。	・ALTは生徒たちのディベートで良かった点と課題を具体的に助言する。	

英語科「コミュニケーション英語Ⅱ」学習指導案

実施日時	平成30年11月16日（金）2校時
場 所	2年A組教室
対 象	2年A組
授 業 者	伊藤健吾
教 科 書	Big Dipper English Communication II

1 単元名 Lesson4 “Space Elevator”

雑誌記事風の英文素材を使って、記事の読み方および宇宙エレベーターの概要を理解させる。

- 2 単元の目標
- （１）本文に関連して、ペアワーク・グループワーク等を通じて自分の意見を言ったり、相手の発表をしっかりと聞こうとしたりする。（関心・意欲・態度）
 - （２）本文の内容を、本文中の表現または他の表現を用いて要約したり、自分の意見を伝えることができる。（表現の能力）
 - （３）宇宙エレベーターの原理が理解できる。宇宙エレベーターの課題、優位点が理解できる。（理解の能力）
 - （４）仮定法過去、関係副詞 **where** の継続用法、未来進行形を理解している。（言語や文化についての知識・理解）

3 単元とCAN-DO形式での学習到達目標との関連 2年（普通科）

理 解		表 現		
リスニング	リーディング	スピーキング		ライティング
		（やりとり）	（発表）	
短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができる。	日常生活において身の回りにある平易なテキストから、必要な情報を読み取ることができる。	日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやり取りをすることができる。	身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができる。	自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができる。

- 4 単元と生徒 41名（男子20名、女子21名）が在籍する普通科特別進学クラス。教科書の各 Lesson、各 part 毎に keywords を用いた retelling や、personalization を用い身近な話題について言語活動を行っている。英語でのやりとりに対しての抵抗感は少なくなってきた。

ペアでのやりとり、グループ内での議論も英語で進めるよう促しているが、語彙不足や自信のなさから徹底できていない。コミュニケーションに対する意欲はあるので、これを語彙や文法を地道に学ぶ姿勢へと結びつけたい。

5 単元計画と評価規準（総時間 7 時間）

	学習活動	A コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	B 外国語表現の能力	C 外国語理解の能力	D 言語や文化についての知識・理解
第 1 時	語句や表現を学び、 part1 を理解する。	Space Elevator について、知っていることを発言しようとする。		英語で書かれた雑誌記事の表現方法を理解する。省略、時制など。	
第 2 時	part1 の内容を、 keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part1 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。 本文に関連して、自分の事を英語で伝えることができる。		
第 3 時	語句や表現を学び、 part2 を理解する。			仮定法過去の用法を理解している。	Space Elevator の問題点を理解し、日本の宇宙開発の現状を理解する。
第 4 時	part2 の内容を、 keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part2 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。 本文に関連して、自分の事を英語で伝えることができる。		
第 5 時	語句や表現を学び、 part3 を理解する。			関係副詞 where の継続用法を理解している。	Space Elevator の優れている点を理解する。
第 6 時	part3 の内容を、 keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part3 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。 本文に関連して、自分の事を英語で伝えることができる。		
第 7 時	語句や表現を学び、 part4 を理解する。			未来進行形の用法を理解している。	Space Elevator の具体的な使い道を理解する。
第 8 時	part4 の内容を、 keywords を用いて自分なりに retelling する。身近な質問についてやりとりをする。	本文を読んだ後に、ペアワークを通じて自分の意見を言ったり相手の発表をしっかりと聞こうとする。	part4 の内容を簡潔にまとめて話すことができる。 本文に関連して、自分の事を英語で伝えることができる。		
第 7 時 (本時)	Space Elevator の優れている点を理解した上で、日本政府はこの project に莫大な国家予算を費やすべきか否か、それぞれの立場で debate を行う。	積極的にディベートに参加しようとする。 他者の意見もしっかりと聞き、友好的にディベートを行おうとする。	本文で学んだ表現を中心に、相手にわかりやすい表現を用いて自分の考えを伝えることができる。		Space Elevator の費用対効果について検証する。また宇宙開発の今後についても考える。

6 本時の学習

- (1) 目標 Space Elevator の優れている点を復習し、その上で日本政府はこのプロジェクトに莫大な国家予算を費やすべきか否か、それぞれの立場で英語の debate を行い、自分達の考えを英語でやり取りすることができる。

(2) 指導計画

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 15 mins	Warm-up Space Elevator についての Talk Show を見て、キーワードを掴み、大まかな内容を理解する。 “While watching, catch some keywords.” “After watching, share the keywords Ss caught.” Hand out the transcript with blanks, and have Ss guess what phrases should be put into them, and share. Watch the video again. Check the answers.	・ALT のサポートを最大限利用して、authentic material を理解する自信を養う。	A B C
展開 30 mins	1) ディベートのテーマを聞き、自分の立場(役割)を確認する。 JTE: “How much would it cost to build a Space Elevator?” ALT: Umm. It would cost ○○ dollars, according to …. Then JTE present the Debate topic. “Should Japanese government pay such large an amount of money on Space Elevator project?” 2) それぞれがブレイン・ストーミングを行い、ディベートの準備をする。Brainstorming 5mins 3) ALT が judge を集め、ジャッジの方法について指導する。ALT explains how to judge. 4) “Affirmative” ※理由を2つ 2mins 5) “Negative” ※理由を2つ 2分 6) “Affirmative” が “Negative” に反論 1min ※You said ～, but I think …. 7) “Negative” が “Affirmative” に反論 1min ※You said～, but I think …. 8) Judgment (ジャッジ) 1min 立場(役割)を交換し、第2ラウンド。 今度は準備3分。すでに出たアイデアでも良い(表現や具体例を変えること)が、新しいアイデアを出すよう促す。 Rotate the Ss roles, and second trial. Ss had better come up with a new idea, if possible.	・テーマを理解し、それぞれの立場を確実に理解しているか確認する。 ・それぞれのスピーチで用いる表現は、お互いが理解できるよう簡単なものにするよう促す。 ・必要であれば、質問を受け付ける。	A B
まとめ 5分	1) ディベートを通して学んだことをふまえて、自分の意見を英語で書く。 Write their own opinions in English. 2) CAN-DO リストを用いて自己評価を行う。 Self Evaluation.	・できる限り簡単な英語で書くよう促す。	

編集後記

研究集録第8号の発行にあたり、ご多忙中にもかかわらずご寄稿いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

今年度研修部としては「生徒の質問力向上」に向けた取り組みを行いました。質問力の向上とともに生徒の学力を伸ばすことを目的とし、今後も研修を積んでいきたいと思うところです。

また、SSH海外研修ではマレーシア、タイ王国にて活動が行われました。異文化地域での研修は生徒に日本人である自覚を促し、異文化を理解し受容することに大きく貢献したものと考えられます。

この集録を今後にご活用いただければ幸いです。次号の充実のため、本誌について忌憚のないご助言、ご指導を頂ければ幸いです。

(研修部)

平成30年度 研究集録 鷹
第8号

発行 秋田県立秋田北鷹高等学校

〒018-3314

秋田県北秋田市伊勢町1番1号

電話番号 (0186) 60-0151

FAX (0186) 62-0555